

死刑囚の表現

永山則夫さんの残したもの

死刑について考えてみませんか

東京拘置所のそばで死刑について考える会（そばの会）

東京拘置所で永山則夫さんが処刑されたのは八年前の八月一日のことでした。永山さんの名前も知らない若い方たちも多いでしょう。

「永山子ども基金」のビラから、紹介します。

☆☆☆

……飢えと貧困にあえぐ幼少期を過ごした永山則夫は、一九歳の時たまたま手に入れた拳銃で四人の尊い命を奪ってしまいました。獄中にありながら、どうすれば二度と自分のような過ちを犯す人間が生まれなくてもすむ社会が作れるかを真剣に考え続け、Nを主人公とする小説をはじめ、数多くの著作を発表した永山則夫は一九九七年八月一日、絞首刑に処せられ「印税は世界の貧しい子どもたちへ。特にペルーの子どもたちへ」という言葉を残しました。……

☆☆☆

当時、ペルーで日本大使公邸占拠事件があり、犯人の中には、一六歳の少女たちも含まれていたと報道されていました。貧困からゲリラに参加し、無抵抗のままに射殺されてしまった子どもたちの姿が永山さんの心にふれ、「特にペルーの子どもたちへ」と記させたのでしょうか。

「永山子ども基金」は、彼の遺志に応え、ペルーの子どもたちに基金を贈る活動を続けています。

☆☆☆

死刑判決が確定すると、死刑囚はごく一部の親族を除いて、文通や面会をすることができません。永山さんの作品の多くも、未決囚の時期に発表されたものでした。

池田浩士・川村湊両氏の対談本『死刑文学を読む』（インパクト出版会、二〇〇五年二月刊）では、永山さんの文学活動にとって、編集者との交流がいかに重要であったかという点が指摘されています。編集者からのアドバイスは意外に素直に受けとめていたようだというエピソードも紹介されています。

遺作となった『華』という作品は、そうした交流も絶たれた中で、書き継がれていたものでした。読み通すのが困難なほどのこの大作について川村さんはこう語っています。

「『華』が完結しない間は俺は死なない、執行されないんだという気持ちがあったんじゃないでしょうか」。

死刑囚が表現することの意味を考えさせられます。永山さんが「東拘大」（東京拘置所大学）と呼んだ東拘の独房で、今も、多くの死刑確定囚が外部との交流を閉ざされた中で、生きている証しのように言葉を刻んでいるはずです。